この国に生まれてきた幸運と、後から来る者」等のために

CNCP 監事
（特非）あそ地下足袋倶楽部
理事長　木村　達夫

古より世界の民族等が各地域の異郷で発生・派生した独特の文明・文化のなか、我が国の先人等は四方が海に囲まれた島国で、気候も比較的温暖で、ある程度はっきりとした「四季の春夏秋冬」に分かれ、恵まれた風土のなか、先人等がそこで種々育んだ文明・文化は、世界で唯一の「１国で、一代文明を形成」した民族と言われている。

そんな民族を、先人に持つ我々が「この国に生まれてきた幸運」と、「後から来る者」等のために種々ある伝統的技術を一つ一つ「確実」に引き継ぐことを仕損じるようなことがあるとするならば、先人等に合わせる顔がないのではないか。

しかし、今、我が国は前々から分かっていた有史以来といわれる「人口の減少とその構成」などに向き合っている。特に、社会的制約のきびしい条件下での結婚、そして育児の「しにくさ」等もその一端で、また、それらは全てにおいて「平和ボケ」をし、それらに対し完全に今まで「ソッポ」を向き続けてきた我々に「つけ」がきたのではないだろうか。

その人口においても、国土の約３分の１の平地（都市部）に集中し、大都市圏に住む人口密度は世界のトップクラスである。我が国の「総生産人口（１５才～６５才）」もすでに２０１４年から下り始め２０５０年までに約２８００万人(年間平均約８０万人)の減少が確実視されている。また、一時期大いに話題になった「年金」等は、破たん寸前で「ゆりかごから墓場まで」は夢のまた夢で、もし年金の破たんを防ぐのであれば、人口が現在の約３倍以上ないと絶対無理との関係者等の試算も出ている。

また、この建設業界も有史以来そこに住む人々等の「ライフ・ライン」の安全・安心を一身に守り続けて来た伝統ある業種であるが、仕事の条件は屋外がほとんどで「3K・5K」とも言われ、また、「耳学問」程度では出来ない「ある程度の年期」も必要な仕事も多く、また、それらの「つらさ」に耐えられない「土木」という仕事を選んだ若い「技術者や技能員」等は、いとも簡単に「ドロップアウト」をしていく。だが、発注者を始めとする皆さん等の目は増々「メイド　イン　ジャパン」の高品質の出来映えの製品を当然に要求してくる。

しかし、首都圏から１００ｋｍも離れれば、「慢性的な仕事不足」の影響もあり、それによる「技術者・技能員」不足は深刻そのもので、すっかり足腰が弱りきっている「地方の建設業」の疲弊はひどく、風前の灯で「休・廃業・倒産」も多くなっているのが現状だ。ただ、今まで災害でも起きれば、「いの一番」に現場に駆け付け、地域の「復旧・復興」を第一に、「ライフ・ライン」の復旧をはたして来た「地方の建設業界」にも、ただ賃金を「雀の涙」程度上げるのではなく、もっと「土木」の仕事に携わり良かったという気持ちと、恩恵があればと考えてもらいたいものだ。

今年、２０１７年2月２４日の金曜日から始まった月末の金曜日に限り、政府や経団連を中心とした経済界が提唱・推進するグッドアイデアの「プレミアル・フライデー」の消費喚起キャンペーンも、「絵に描いた餅」にならないよう、なんとか「働く者」のために、いまは駄目でも息を長―くして続けてもらいたいものだ。それにはこの趣旨の長―い取組みも必要だ。あるいは思い切って、２０数年前まであった「土曜日の半ドン」の復活でもいいのではないか。それもこれも「地方の建設業」では「オヤジ」の考え方一つで出来ることだと思うが。

それでも我々は「この国に生まれてきた幸運と、後から来る者」等のため何が何でも幸運を「後から来る者」等のために命がある限り、続けていきたいものだ。